Ⅱ　大学生の語学に対する意識調査

大学生の語学に対する意識と行動

熊谷　茉紀

１　問題

東洋経済新報社の「海外進出企業総覧 2013 年度版」（2012 年 10 月調査実施）によると、世界に進出している日本企業の海外現地法人数が 25,263 社に上ることが明らかになった。このように多くの会社が海外進出を図る中、グローバル化に対応できる人材が求められていることがわかる。

ジェイニュースは、「英語版、読売新聞のある記事が海外で反響を呼んでいる」として次のように掲載している。70％の日本の学生たちが「英語は就職に役立つ」と回答する一方、30％の学生は「英語に使う職にはありつきたくない」と回答している。また、80％の学生が「英語は大事だと思う」と回答しているが、「英語を中心とした職に就きたい」と答えた学生は 11％にしか満たなかった。

これらのことから、英語が重要だとはわかっているが、英語に苦手意識を持っている人が多いのかもしれない。英語が必要とされている中で、大学生が大学生活の中でどのような英語の学習をしているのか、そもそも英語を学習することに対してどのように考えているかを明らかにしたい。本調査は、自らの英語力に対して持っている認識、英語を学習する際の行動、英語に対する心理的欲求、英語学習に対する動機付けなどについて調査するものである。

英語学習に関する研究では、市川（1995a）の学習動機の研究がある。市川（1995a）は、6 種類の学習動機を抽出している。6 種類の学習動機は充実志向（学習自体が面白い）、訓練志向（頭をきたえるため）、実用志向（仕事や生活に活かす）、関係志向（他者につられて）、自尊志向（プライドや競争心から）、報酬志向（報酬を得る手段として）である。

次に、久保（1997）は市川（1995a）の学習動機 6 志向の信頼性と妥当性の検討をしている。これによると学習動機は、学習が面白い、頭を鍛えるなどの「充実・訓練志向」と、プライドや自尊心、報酬を得る手段などの「自尊・報酬志向」の 2 要因が抽出されている。この二つの要因と学習時間、学習観との関連では、「充実・訓練志向」は授業以外の学習時間と正の相関、くじけず次に生かそうとする「失敗に対する柔軟性」の学習観や、結果より考えることを重視する「思考過程の重視」の学習観と正の相関、「自尊・報酬志向」は「思考過程の重視」と負の相関が示されている。これらのことから、英語の学習自体が面白いと思って学習している人は、授業以外の時間も学習し、学習内容を重視する。プライドや自尊心、報酬を得る手段として英語の学習している人は、学習内容ではなく、学習の結果を重視するということがわかる。

性別による英語学習への態度について、枝澤（2005）は、英語を好きだと回答する程度は男子学生よりも女子学生の方が高いことを示している。つまり女性の方が英語学習にポ

ジティブであるといえる。

そこで本調査では、英語の学習について、英語を学ぶこと自体を目的とする「価値合理的行為」と、英語を手段として何かの目的を果たす「目的合理的行為」ととらえ、学習方法、学習の取り組みの観点から英語学習目的を検討する。

調査目的 1　英語学習目的の構成要素を明らかにする
調査目的 2　学習目的による学習方法、学習の取り組みの違いを検討する

2　調査方法

2.1　調査手続き

1）調査手続き

本調査では、以下の手続きで質問紙調査を実施した。

調査実施期間　2013 年 9 月 25 日～10 月 8 日
調査対象者　成城大学の学生。ただし、大学院生は対象外とした。

2）調査方法

層化の基準を「性別」と「高学年/低学年」として高学年、低学年の男女の回答数が同数になるように調査数を割り当て、合計 327 名を対象に留置調査法（自記式）による回答を依頼した。有効回答数は 149 であり、回収率は 45.6%であった。（調査票配布数と層別回収数については資料 1 を参照）

2.2　分析項目

本研究に用いられた調査項目は次の通りである。

1）語学の学習状況

語学の学習状況を問う項目である。大学で学んでいる第一外国語、第二外国語について、英語やドイツ語など 9 言語の回答選択肢の中から受講中または履修した言語に回答を求めた。またこれ以外に学習したことがある言語について自由記述で回答を求めた。

2）英習に関する学習方法

日常での英語においてどのような学習の仕方をしているかを測定する項目である。佐藤・佐藤（2008）の英語学習動機づけの項目を用いた。具体的な質問項目は、「英語の授業に 8 割以上出席している（出席していた）」、「試験や面接前など、限定した期間に集中的に学習している」などの 18 項目であり、それぞれの項目に対して「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」の 4 件法で回答を求め「あてはまる」を 4 点、「あてはまらない」を 1 点として得点化した。

3）英語に関する学習目的

なぜ英語を学習するのかを問う項目である。久保（1997）の英語学習動機尺度の充実・訓練志向を構成する項目を参考に作成した。質問項目は、「英語で映画や音楽、テレビを理解できるようになるため」「英語の学習自体が楽しい」などの 20 項目であり、それぞれの項目に対して「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」の 4 件法で回答を求め、「あてはまる」を 4 点、「あてはまらない」を 1 点として得点化した。

4）仕事に対する価値観

「なぜ働くのか、何のために働くのか」、働くということそのものに対する価値観を調べる佐藤・広田（2003）の労働動機測定尺度を用いた。「社会の義務だから」、「裕福な暮らしをするため」、「社会に貢献するため」などの 20 項目を抜粋して、「とてもそう思う」、「少しそう思う」、「どちらでもない」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の 5 件法で回答を求め、「とてもそう思う」を 5 点、「まったくそう思わない」を 1 点として得点化した。

5）英語への取り組み

自分自身で思う、英語学習への取り組みについて問う項目である。英語学習を自発的にしているか否か、英語が好きか否か、英語が得意な否かについて各々どちらかに回答を求めた。

6）個人属性

回答者個人の基本属性として、「性別」、「学部」、「学年」を質問項目とした。

3　結果

3.1　各尺度の作成

1）英語学習方法

英語の学習の仕方を問う 18 項目に対する回答データをもとに、主因子法による因子分析を行った。因子抽出後の共通性が著しく低い 2 項目を除外し、固有値の減衰状況およびバリマックス回転後の因子パターンの単純性・解釈可能性の観点から 2 因子解を採用した。そして、各因子への因子負荷量の絶対値が高く、かつ当該因子以外への因子負荷量が低い項目をそれぞれの因子の項目として選択し下位尺度を構成した。第 1 因子は、「英語の会話力が上がるよう実践している」、「英語の聴解力の実践に努めている」などの項目内容から「英語力向上」と命名した。第 2 因子は、「英語学習でわからないことがあったとき自分で調べる」、「英語の授業に 8 割以上出席している（出席していた）」などの項目内容から「授業内学習重視」と命名した。信頼性の検討のためクローンバックのα係数を算出したとこ

ろ、英語力向上因子では 0.817　授業内学習重視因子では 0.561 であった。英語力向上因子に高い因子負荷量をもつ項目をこの因子の代表項目として加算して合計得点を求め、英語力向上得点とした。授業内学習重視因子は信頼性係数が低いことから内的一貫性が十分ではないと判断し、この後の分析では各項目ごとに扱うことにした。バリマックス回転後の因子負荷量および各下位尺度の信頼性係数を表１に示した。

表 1　英語学習方法の因子分析

	英語力向上	授業内学習重視	共通性
英語の会話力が上がるよう実践している	.770	.134	.610
英語の聴解力の実践に努めている	.755	.271	.643
英語の読解力がつくように実践している	.723	.339	.638
自分からすすんで英語で人と話している	.696	-.067	.489
英語の作文力がつくように実践している	.558	.292	.397
英語が上達すると褒めてくれる人がいる（誰：　　）	.519	.051	.272
テレビやラジオなどの英語講座で勉強している（勉強していた）	.509	.011	.259
自分独自の英語の勉強法（具体的に：　　）を持っている	.490	-.097	.250
英語学習でわからないことがあったとき質問できる相手がいる	.453	.036	.206
英会話学校の講義（自宅個人レッスンを含む）を受けている（受けていた）	.355	-.152	.149
必修科目以外に英語の科目を履修している（履修していた）	.345	.095	.128
学習時間や学習範囲を決めて計画的に学習している	.341	.257	.182
英語の授業の際にはおおむね予習･復習をしている（していた）	.059	.669	.451
英語の授業に8割以上出席している（出席していた）	.069	.546	.303
試験や面接前など、限定した期間に集中的に学習している	-.143	.462	.234
英語学習でわからないことがあったとき自分で調べる	.244	.317	.160
累積寄与率	24.402	33.577	
α係数	.817	.561	

2）英語学習目的

英語を学習する目的を問う 20 項目に対する回答データをもとに、主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況およびバリマックス回転後の因子パターンの単純性・解釈可能性の観点から 2 因子解を採用した。そして、各因子への因子負荷量の絶対値が.30 以上であり、かつ当該因子以外への因子負荷量が低い項目をそれぞれの因子の項目として選択し下位尺度を構成した。第 1 因子は、「英語学習自体が楽しい」、「自分の可能性を広げるため」などの項目内容から「充実志向」と命名した。第 2 因子は、「学生としての義務である」、

「就職活動で有利になるために英語力の養成が必要である」などの項目内容から「社会的評価」と命名した。次に、第１、第２各々の因子に高い負荷量を持ち、それぞれの因子を代表する項目を加算して合計得点を求め、「充実志向得点」「社会的評価得点」とした。バリマックス回転後の因子負荷量および各下位尺度の信頼性係数を表 2 に示した。

表 2　英語学習目的の因子分析

	充実志向	社会的評価	共通性
英語の学習自体が楽しい	.694	.207	.524
自分の可能性を広げるため	.677	.148	.481
英語で本や雑誌、新聞など読めるようになるため	.640	.252	.473
英語を使う喜びを知るため	.636	-.091	.413
外国人と話すため (英語でコミュニケーションとるため)	.618	.270	.455
将来英語を使って海外で仕事するため	.609	.211	.416
英語圏の文化や価値観についての知識を得ることが楽しい	.607	-.160	.394
英語で映画や音楽、テレビを理解できるようになるため	.600	.066	.365
英語という言語についてもっと知るため	.564	.006	.318
外国の大学に留学したいと考えている または、留学した	.546	.000	.298
海外旅行するため	.533	.099	.293
英語を話せる有能な人間であることを示すため	.505	.342	.372
いろいろな面から物事が考えられるようになる	.493	.367	.378
今まで身につけた英語能力を維持するため	.447	.396	.357
少しでも英語力がついたと感じるのが嬉しい	.405	.317	.265
将来、起業するため	.327	.006	.107
大学での単位、卒業に必要である	-.349	.693	.602
学生としての義務である	-.167	.628	.423
英語資格試験で高得点や上の級を取得するため	.391	.528	.432
就職活動で有利になるために英語力の養成が必要である	.318	.457	.310
累積寄与率	27.533	38.361	
α係数	.888	.617	

3.2　英語への取り組みの違いによる英語力向上得点の比較

英語への取り組みの違い（自発的・非自発的）による英語力向上得点の違いについて、t 検定を行いその結果を表 3 に示した。英語への取り組みの違いによる英語力向上得点には有意な差が見られた（t=-8.173,p<.001）。

表 3　英語力向上得点の平均値（自発的・非自発的）

	自発的に英語学習	非自発的	t値
全体	29.630	21.084	-8.173 ***
男性	32.385	20.111	-4.869 ***
女性	28.546	21.960	-5.367 ***

***p<.001,**p<.01,*p<.05

英語への取り組みの違い（好き・好きではない）による英語力向上得点の違いについて、t 検定を行いその結果を表 4 に示した。英語への取り組みの違いによる英語力向上得点には有意な差が見られた（t=6.338,p<.001）。

表 4　英語力向上得点の平均値（好き・好きではない）

	英語が好き	好きではない	t値
全体	26.687	20.300	6.338 ***
男性	25.824	19.280	3.665 **
女性	27.286	21.029	5.063 ***

***p<.001,**p<.01,*p<.05

英語への取り組みの違い（得意・不得意）による英語力向上得点の違いについて、t 検定を行いその結果を表 5 に示した。英語への取り組みの違いによる英語力向上得点には有意な差が見られた（t=-5.914,p<.001）。

表 5　英語力向上得点の平均値（得意・不得意）

	英語は得意	不得意	t値
全体	29.444	22.178	-5.914 ***
男性	29.625	20.605	-3.599 **
女性	29.300	23.234	-4.055 ***

***p<.001,**p<.01,*p<.05

英語学習目的の 2 因子（充実志向、社会的評価）の得点の程度による英語力向上の得点の違いを調べるために以下の変数を作成した。

充実志向高群・低群

充実志向得点の平均値を求め、それより高い場合を充実志向高群（N=68）、低い場合を充実志向低群（N＝79）とした。

社会的評価高群・低群

社会的評価得点の平均値を求め、それより高い場合を社会的評価高群（N=73）、低い場合を社会的評価低群（N＝76）とした。

充実志向高群・低群による英語力向上得点の違いについて、t 検定を行いその結果を表 6 に示した。充実志向高群・低群による英語力向上得点には有意な差が見られた（t=-8.499,p<.001）。

表 6　英語力向上得点の平均値（充実志向高群・低群）

	充実志向得点高群	充実志向得点低群	t値
全体	28.773	20.192	-8.499 ***
男性	30.000	19.211	-5.452 ***
女性	28.200	21.125	-5.795 ***

***p<.001,**p<.01,*p<.05

社会的評価高群・低群による英語力向上得点 t 検定を行いその結果を表 7 に示した。社会的評価高群・低群による英語力向上得点には、有意な差が見られた（t=-2.012,p<.05）。

表 7　英語力向上得点の平均値（社会的評価高群･低群）

	社会的評価得点高群	社会的評価得点低群	t値
全体	24.534	23.847	-0.567
男性	20.957	24.389	1.867
女性	26.180	23.306	-2.012 *

*p<.05

3.3　英語の学習方法と英語学習目的の関連

英語力向上得点と充実志向、社会的評価の関連を調べたところ、充実志向と英語力向上（r=.679,P<.01）、社会評価と英語力向上（女性）（r=.379,P<.01）との間に統計的に有意な正の相関がみられた（表 8）。

表 8　英語力向上得点と英語学習目的 2 因子の得点の相関係数

	全体	男性	女性
充実志向	.679 **	.675 **	.679 **
社会的評価	.112	-.239	.379 **

**p<.01, *p<.05

4　考察

4.1　英語学習目的の構成要素

英語学習目的の因子分析の結果、「英語学習自体が楽しい」、「自分の可能性を広げるため」などの「充実志向」と「学生としての義務である」、「就職活動で有利になるために英語力の養成が必要である」などの「社会的評価」が抽出されている。英語学習目的 2 因子の信頼性係数を算出したところ、充実志向　.888、社会的評価　.617 であり、おおむね内的一貫性があるといえる。「充実志向」は英語習得という行為が目的の「価値合理的行為」にあたり、「社会的評価」は英語を手段として何かの目的を果たす「目的合理的行為」にあたる。

英語学習目的の 2 因子（充実志向、社会的評価）の得点の程度による英語力向上の得点の違いについて t 検定を行った結果、充実志向では男女ともに高群が、社会的評価では女性のみ高群の平均点が高かった。これは、男女ともに充実志向目的が高い場合、女性では社会的評価の目的が高い場合に、英語力向上を目指した学習をしていることがわかる。

次に英語学習目的 2 因子と英語学習方法の英語力向上因子との関連について、相関係数を求めた結果、英語学習目的と充実志向の間に、正の相関が見られた。これにより、「英語学習自体が楽しい」、「自分の可能性を広げるため」などの「充実志向」から英語を学習することがわかる。

本調査の結果は、久保（1997）の、「充実･訓練志向は、学習内容や過程を重視している。そして、自己の充実に注目し、必ずしも他者から観察されるわけではない自己の内面を見る傾向が反映されている」と同じことを示している。

4.2　学習の取り組みの違いと学習方法

英語学習の動機が、学ぶことが目的ならば、英語力向上が大きい、また学習への取り組みも自発的であると予測した。

英語への取り組みの違い（自発的・非自発的）による英語力向上得点の違いについて、t 検定を行った。t 検定の結果、英語力向上得点は、自発的の方が男女ともに平均値が高かった。この結果から、英語を自発的に学習する人は英語力向上を目指した学習をしていることがわかった。次に、英語への取り組みの違い（好き・好きではない）による英語力向上得点の違いについて、t 検定を行った。t 検定の結果、英語が好きと回答したほうが英語力向上得点が高かった。この結果から、英語が好きな人は英語力向上を目指した学習をしていることがわかった。さらに、英語への取り組みの違い（得意・不得意）による英語力向上得点の違いについて、t 検定を行った。t 検定の結果、英語が得意と回答したほうが英語力向上得点が高かった。この結果から、英語が得意な人は英語力向上を目指した学習をしていることがわかった。

本調査では、久保（1997）のように、自意識が英語学習に対して反映された結果となった。久保（1997）は、「英語学習の動機付けの問題は、学習方法やパフォーマンスなどに深く関わっていることが明白である。学習において、自分なりの基準を持ち自己の内面に注目することや他者との比較できる外面に注目することは、自意識全般を反映したものだと考える。そして学習者自身の中で学習が重要な位置を占めるほど自意識全般の傾向を大きくする。」と述べている。

また、学習時間を聞く項目を追加することで充実志向が学習時間に反映されているかが見られるだろう。久保（1997）によると、充実･訓練志向は学習時間と正の相関を示し、自尊･訓練志向は学習時間と相関を示さなかった。学習時間と学習動機に関わりがあるのかを調べる必要がある。

引用文献

枝澤康代　2005 日本人大学生の外国語習得に見られる異文化受容と性差　同志社女子大学　総合文化研究所紀要, 第 22 巻, 64-74.

堀野緑・市川伸一　1992　大学生の基本的学習観の形成要因の考察―心理尺度と面接法による学習者情報の活用―　教育情報研究, 8, 3-10.

市川伸一　1995a　学校と教育の心理学　岩波書店.

市川伸一　1995b　学習動機の構造と学習観との関連　日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集, 177.

ジェイニュース　http://blog.livedoor.jp/janews/archives/6657546.html（2013 年 12 月 13 日）.

久保信子　1997　大学生の英語学習動機尺度の作成と検討：学習動機,認知的評価,学習行動およびパフォーマンスの関連　教育心理学研究,第 45 巻　第 4 号, 449-455.

佐藤博晴（山形県立米澤女子短期大学）・佐藤夏子（東北工業大学）　2008　本学生の英語学習に対する動機づけと学習行動に関する調査　山形県立米沢女子短期大学紀要, 44 号, 25-34.

佐藤純・広田信一　2003　大学生の労働観に関する探索的研究-労働動機の側面から-　筑波大学発達臨床心理学研究, 15, 31-36.

東洋経済新報社　東洋経済データベース『海外進出企業総覧』http://dbs.toyokeizai.net/products/list.php?category_id=20（2014 年 1 月 20 日）.

大学生の英語学習と労働観について

森　愛那

1　はじめに

大学生の多くは現在またはこれまでの間に、学校の授業他で英語を学習している。日本の英語教育について文部科学省（2013）は、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるため、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に実施するための「英語教育改革実施計画」を公表した。この計画に基づき、2014 年度から小中高等学校において、さらに高度な英語教育が行われる。この背景として、近年の経済・社会のグローバル化に伴い、社会全体が英語の学習に力を入れる傾向がある。

この傾向は、就職活動においても顕著になっており、やはり学生には英語力が求められる。企業が求める英語力について、株式会社 TBS テレビ人事部の藤田は、新卒採用の際、多くの企業が TOEIC の点数を参考にすると述べている。これは、どの部署でも英語を使う機会があるためで、年々増加傾向にある。業界に関わらず、企業のエントリーシートには大概語学力を書きこむ欄が設けられており、学生の 6~7 割が TOEIC のスコアを記入しているという。また、同会社では研修中に新入社員全員に、TOEIC を受験させるシステムがある。入社後は毎日忙しくなることが予想されるため、英語を勉強する時間を取るのは難しい。したがって、入社までに英語力があるとそれだけで差がつき、キャリアの幅は広がると思われる。実際、新入社員の平均スコアは年々上昇傾向にある。これは、入社したら英語が必要になると感じて、学生時代から勉強をする人が増えたためであり、希望する企業に就職するための一つの手段として英語を学習していると捉えることができる。

和田（2001）によると、学生の側から見ると、企業が社員を採用する際に重視すると思われる事柄は『大学』『家族』『個人』の 3 因子で説明できる。学生は、中でも「個人の資質」が特に重視されているのではないかと感じているようである、という結果が出ている。すなわち、社会においては英語力のある人が優秀とみなされ、求められる傾向がある。これは、就職活動の際に、企業が英語力がある人材を評価することからも伺える。

また、仕事についての意識は、男性と女性では必ずしも同じでないことは、先行研究で明らかにされている。益田（1996）によると、学生の大多数は就職を希望しており、その理由として男女ともに「収入をえるため」、「親から自立するため」ということが挙げられた。しかし、これに加え男性のほうでは「生きがいをみつけるため」が続く結果となっている。やはり男性の方が、女性よりも仕事に対する意識が高いのではないか。

以上をふまえて本調査では、大学生の英語学習と労働観との関係について明らかにする。

2　方法

本報告では以下の項目を分析対象とした。

1）学習方法

英語の学習の仕方に対する 18 項目の因子分析を行った結果に基づいて 2 因子「英語力向上」「授業内学習重視」を採用した。英語力向上を代表する項目を加算して合計得点を求め、「英語力向上得点」として分析を行った。授業内学習重視因子については信頼性の低いことから内的一貫性が十分ではないと判断し、各項目ごとに分析を行った。

2）学習理由

英語の学習の理由に対する 20 項目の因子分析を行った結果に基づいて 2 因子「充実志向」「社会的評価」を採用した。それぞれの因子を代表する項目を加算して合計得点を求め、「充実志向得点」「社会的評価得点」として分析を行った。

3）労働動機尺度

大学生における労働観を調べるための一つの切り口として、労働動機の観点を採用した。「なぜ人は働くのか、何のために働くのか」という人が働く動機を測定する佐藤ら（2003）の労働動機尺度の中から、「自己成長」、「社会的義務」、「経済的向上」の下位尺度などを構成する 20 項目を抜粋して用いた。「自分の能力を伸ばすため」、「人間として成長するため」、「社会の義務だから」、「働かないと世間体が悪いから」、「裕福な暮らしをするため」などの質問項目について、「とてもそう思う」、「少しそう思う」、「どちらでもない」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の 5 件法で回答を求め、「とてもそう思う」を 5 点、「まったくそう思わない」を 1 点として得点化した。

4）個人属性

回答者個人の基本的属性として、「性別」、「学年」を質問項目とした。なお、「学年」の回答の 1 年と 2 年を低学年（N＝77）、3 年と 4 年を高学年（N＝72）として分析を行った。

3　結果

3.1　労働観尺度の作成

労働観に関する 20 項目に対する回答データをもとに、主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況及びバリマックス回転後の因子パターンの単純性・解釈可能性の観点から 3 因子解を採用した。そして、各因子への因子負荷量の絶対値が .35 以上であり、かつ当該因子以外への因子負荷量が低い項目をそれぞれの因子の項目として選択し下位尺度を構成した。第 1 因子は、「自分の能力を伸ばすため」、「新たなことに挑戦するため」などの項目内容から「自己成長」と命名した。第 2 因子は、「働かないとみっともないから」、「社会の義務だから」などの項目内容から「社会的義務」と命名した。第 3 因子は、「裕福な暮らしをするため」、「金持ちになるため」などの項目内容から「経済的向上」と命名した。

第 1、第 2、第 3 因子各々に高い負荷量をもち、それぞれの因子を代表する項目を加算して合計得点を求め「自己成長得点」「社会的義務得点」「経済的向上得点」とした。信頼性の検討のためクローンバックのα係数を算出したところ、内的一貫性が見られた。バリマックス回転後の因子負荷量および各下位尺度の信頼性係数を表 1 に示した。

表 1　労働観の因子分析

	自己成長	社会的義務	経済的向上	共通性
自分の可能性を広げるため	.764	-.032	.056	.588
達成感を得るため	.729	.078	.060	.541
人の役に立つため	.724	.224	-.188	.610
社会に貢献するため	.715	.316	-.261	.679
自分の能力を伸ばすため	.708	.024	.169	.530
人間として成長するため	.707	-.038	.213	.546
自分に自信をつけるため	.688	.295	.104	.572
新たなことに挑戦するため	.682	-.058	.261	.537
自分のやりたいことをやるため	.597	-.061	.220	.409
社会とつながりを続けるため	.395	.362	.314	.385
働かないとみっともないから	-.041	.813	.084	.670
周りの人がみんな働くから	.072	.746	.120	.576
働かないと人から非難されるから	-.009	.700	.135	.508
働かないと世間体が悪いため	-.097	.672	.289	.544
当たり前のことだから	.147	.612	.127	.412
社会の義務だから	.306	.484	-.008	.328
裕福な暮らしをするため	.019	.324	.683	.572
金持ちになるため	.049	.189	.569	.362
良い暮らしをするため	.102	.182	.535	.330
自分が望むものを得るため	.335	-.080	.497	.365
累積寄与率	24.296	40.962	50.326	
α係数	.895	.843	.699	

3.2　性別、学年による労働観因子の比較

性別、学年によって労働観の各得点に差があるかを調べるためにｔ検定を行い、その結果を表 2、表 3 に示した。性別では、自己成長（ｔ＝-2.399, p<.05）の平均値に有意な差が見られた。学年別では、どの平均値にも有意な差は見られなかった。

表 2　労働観因子の各得点の平均値（男性・女性の場合）

	男性	女性	t値
自己成長	39.66	42.47	-2.399 *
社会的義務	22.39	23.15	-0.932
経済的向上	16.75	16.73	0.065

*p<.05

表 3　労働観因子の各得点の平均値（低学年・高学年の場合）

	低学年	高学年	t値
自己成長	40.66	42.01	-1.217
社会的義務	22.68	23.01	-0.423
経済的向上	16.77	16.71	0.143

3.3　労働観と英語学習方法の合計得点の相関

1）全体、男女別からみる労働観と英語学習方法との相関

全体と性別のそれぞれにおいて、各因子間に相関が見られるか調べるために、労働観因子と英語学習方法の相関係数を求め、その結果を表４に示した。自己成長では全体は英語力向上（r=.228）と「英語学習でわからないことがあったとき自分で調べる。」（r=.221）と「英語の授業の際にはおおむね予習・復習をしている（していた）。」（r=.355）と「英語の授業に 8 割以上出席している（していた）。」（r=.189）、男性は「英語の授業の際にはおおむね予習・復習をしている（していた）。」（r=.326）、女性は英語力向上（r=.353）と「英語の授業の際にはおおむね予習・復習をしている（していた）。」（r=.308）との間でそれぞれ正の相関が見られた。次に社会的義務では、全体は「英語の授業の際にはおおむね予習・復習をしている（していた）。」（r=.237）、女性は「英語の授業の際にはおおむね予習・復習をしている（していた）。」（r=.299）と「英語の授業には 8 割以上出席している（出席していた）。」（r=.216）との間で正の相関が見られた。最後に経済的向上では全体は英語力向上（r=.207）、女性は英語力向上（r=.345）との間で正の相関が見られた。

表４　労働観因子と英語学習方法の相関係数（全体と男性・女性の場合）

	自己成長			社会的義務			経済的向上		
	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性
英語力向上	.228 **	.086	.353 **	.018	-.134	.134	.207 *	.071	.345 **
英語学習でわからないことがあったとき自分で調べる	.221 **	.141	.296	-.057	-.228	.080	.033	-.137	.189
英語の授業の際にはおおむね予習･復習をしている	.355 **	.326 *	.308 **	.237 **	.148	.299 **	.052	.030	.081
試験や面接前など、限定した期間に集中的に学習している	.047	-.028	.093	.061	-.101	.193	.035	.020	.051
英語の授業に8割以上出席している	.189 *	.158	.173	.127	.006	.216 *	.022	-.067	.110

**p<.01, *p<.05

2）学年別からみる労働観と英語学習方法との相関

学年の違いにより、各因子間に相関が見られるか調べるために、労働観因子と英語学習方法の相関係数を求め、その結果を表 5 に示した。自己成長では低学年は「英語の授業の

際にはおおむね予習･復習をしている（していた）。」（r=.336）、高学年は英語力向上（r=.333）と「英語学習でわからないことがあったとき自分で調べる。」（r=.347）と「英語の授業の際にはおおむね予習・復習をしている（していた）。」（r=.355）との間で正の相関が見られた。次に、社会的義務では低学年は「英語の授業の際にはおおむね予習・復習をしている（していた）。」（r=.326）との間で正の相関が見られた。経済的向上では高学年は英語力向上（r=.301）　との間で正の相関が見られた。

表 5　労働観因子と英語学習方法の相関係数（低学年・高学年の場合）

	自己成長		社会的義務		経済的向上	
	低学年	高学年	低学年	高学年	低学年	高学年
英語力向上	.132	.333 **	-.069	.102	.110	.301 *
英語学習でわからないことがあったとき自分で調べる	.091	.347 **	.061	-.210	.007	.072
英語の授業の際にはおおむね予習･復習をしている	.336 **	.355 **	.326 **	.133	.076	.030
試験や面接前など、限定した期間に集中的に学習している	-.085	.179	.060	.052	.031	.049
英語の授業に8割以上出席している	.165	.232	.147	.121	.082	-.025

**p<.01, *p<.05

3.4　労働観と英語学習理由の合計得点の相関

1）全体、男女別からみる労働観と英語学習理由との相関

表 6　労働観因子と英語学習理由の相関係数（全体と男性・女性の場合）

	自己成長			社会的義務			経済的向上		
	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性
充実志向	.436 **	.334 **	.511 **	.135	.040	.186	.284 **	.216	.350 **
社会的評価	.426 **	.420 **	.375 **	.312 **	.247	.352 **	.088	-.136	.302 **

**p<.01, *p<.05

全体と性別のそれぞれにおいて、各因子間に相関が見られるか調べるために、労働観因子と英語学習理由の相関係数を求め、その結果を表 6 に示した。自己成長では全体、男性、女性ともに充実志向（r=.436, r=.334, r=511）と社会的評価（r=.426, r=420, r=.375）との間でそれぞれ正の相関が見られた。次に、社会的義務では全体は社会的評価（r=.312）、女

性は社会的評価（r=.352）との間で正の相関が見られた。最後に、経済的向上では全体は充実志向（r=.284)、女性は充実志向（r=.350）と社会的評価（r=.302）との間で正の相関が見られた。

2）学年別からみる労働観と英語学習理由との相関

学年の違いにより、各因子間に相関が見られるか調べるために、労働観因子と英語学習理由の相関係数を求め、その結果を表７に示した。自己成長では、低学年・高学年ともに充実志向（r-.375, r=.515）と社会的評価（r=.277, r=.571）との間で正の相関が見られた。社会的義務では、低学年・高学年ともに社会的評価（r=.286, r=.336）との間で正の相関が見られた。経済的向上では、高学年は充実志向（r=.412）との間で正の相関が見られた。

表 7　労働観因子と英語学習理由の相関係数（低学年・高学年の場合）

	自己成長		社会的義務		経済的向上	
	低学年	高学年	低学年	高学年	低学年	高学年
充実志向	.375 **	.515 **	.054	.211	.152	.412 **
社会的評価	.277 *	.571 **	.286 *	.336 **	.011	.166

**p<.01, *p<.05

4　考察

4.1　性差、学年差にみる労働観の比較（表 2）

自己成長得点は、男性より女性のほうが高い。したがって、女性は男性よりも仕事に対して自分の可能性や能力の拡大や、新しいことへの挑戦を求める傾向が高いことがわかった。益田（1996）によると、家庭生活について「女性は子どもができたら職をやめ、大きくなったらまた働くのがよい」、「夫は外で働き、妻は家庭を守る」と考える大学生は男女ともに少なくないと述べている。このことから、男性は家庭を支えるという使命のため、仕事の選択において、ある程度金銭面や地位のことを考慮しなければならない。それに対し、女性はそうしたしがらみなく、自由に好きな仕事を選べるため、仕事に対するモチベーションも違ってくるのではないかと考えられる。

4.2　労働観と英語学習方法の合計得点の関連

1）全体、男女差にみる労働観と英語学習方法との関連（表 3）

まず、英語力向上において、女性は自己成長と経済的向上の間に相関が見られた。このことから、自身の英語力を高めること自体を目的として英語学習を行っている学生ほど、働いてより高い給与を得ようとする傾向が高いことがわかる。したがって、女性の場合、より高い給与を得られる職業に就くためには、高い英語力が必要であると考えているとい

える。

つぎに、社会的義務において、女性は「英語の授業の際にはおおむね予習・復習をしている（していた）。」「英語の授業に 8 割以上出席している（出席していた）。」の項目の間に相関が見られた。それらの項目は、授業を受けるにあたってどれほど真剣な姿勢で臨んでいるかを測る質問である。このことから、授業を真剣に受けている学生ほど、労働に対して人間の義務であると考える傾向が高いことがわかる。したがって、女性の場合、英語学習に対する態度も学生の義務意識からきているものなのではないかと考えられる。

2）学年差にみる労働観と英語学習方法との関連（表 4）

まず、自己成長において、高学年では英語力向上と「英語学習でわからないことがあったとき自分で調べる。」の項目の間に相関が見られた。このことから、自身の英語力を高めること自体を目的として英語学習を行っている学生ほど、労働において自己の成長を重視する傾向が高いことがわかる。また、相関の見られた項目は積極性を測るための質問である。したがって、高学年の場合、ある行動をするとき、その行動自体が自己の成長を重視した目的であると考えられる。

つぎに、社会的義務において、低学年では「英語の授業の際にはおおむね予習・復習をしている（していた）。」の項目の間に相関が見られた。このことから、授業を真剣に受けている学生ほど、労働に対して人間の義務であると考える傾向が高いことがわかる。したがって、低学年の場合、英語学習に対する態度も学生の義務意識からきているものなのではないかと考えられる。

4.3　労働観と英語学習理由の合計得点の関連

1）全体、男女差にみる労働観と英語学習理由との関連（表 5）

まず、充実志向において、女性は経済的向上との間で相関が見られた。このことから、英語を手段として用いる目的で英語学習を行う学生ほど、働いてより高い給与を得ようとする傾向が高いことがわかる。したがって、女性の場合、より高い給与を得るという目的が、英語学習を行うことに繋がっているのではないかと考えられる。

つぎに、社会的評価において、女性は社会的義務と経済的向上との間で相関が見られた。このことから、資格取得や卒業を目的として英語学習を行っている学生ほど、労働を義務であると考える傾向が高いことがわかる。したがって、女性の場合、英語学習や労働に対して人間としての義務感を強く持っていると考えられる。また、そうした学生は資格やより高い英語力が、将来より高い給与に繋がると考えている傾向が高いといえる。

2）学年差にみる労働観と英語学習理由との関連（表 6）

充実志向において、高学年は経済的向上との間で相関が見られた。このことから、英語を手段として用いる目的で英語学習を行う学生ほど、働いてより高い給与を得ようとする

傾向が高いことがわかる。したがって、高学年の場合、より高い給与を得るという目的が、英語学習を行うことに繋がっているのではないかと考えられる。

4.4　まとめ

本研究では、大学生を対象に「語学に対する意識」を質問することによって、大学生が保持する労働観について英語学習という側面から検討を行った。その結果、「英語学習を手段あるいは目的として行う場合において、労働観にどのような違いが見られるかを明らかにする」という調査目的を果たすことができた。

まず、女性の場合、英語学習を手段として行っている学生と、目的として行っている学生のどちらも、将来的により高い給与を得られる仕事に就こうとしていることがわかった。そのためには高レベルの英語力が必要だと感じ、またそのことが英語を学習するモチベーションとなっているのではないかと思われる。同時に、女性は社会的義務が強い傾向がある。予習・復習を行ったうえで授業に出席することと、仕事をすることの両方について損得感情はなく、義務として行っていることが読み取れた。ただし、学生時代に取得した資格などは、希望の仕事に就くための手段として用いている。

つぎに、高学年の場合、英語学習を手段として行っている学生は、やはりより高い給与を得られる仕事に就こうとしていることがわかった。しかし、目的として英語学習を行っている学生は、労働においても自己の成長を重視する傾向が見られた。これは本来あるべき姿であり、非常に意欲の高い学生といえる。高澤（2008）によると、「働く目的に実務的な志向をもつ者は、自らの発達について社会的なつながりや経験を積むといった規範的な側面を重視する」という結果が出ている。

本調査では、調査結果をもとに考察を行ったが、今回は性別・学年別によって英語学習と労働観がどのような関係にあるのか、についてのみの言及であった。したがって、性差・学年差による傾向の違いがなぜ起きたのか、という原因の部分を明らかにすることができなかった。また、各分析において、男性の有意な結果が得られず、男性についての考察が不十分であった。この点は本研究の問題点であり、今後の課題である。

引用文献

久保信子　1997　大学生の英語学習動機尺度の作成とその検討　教育心理学研究, 45（4）, 449-455.

益田良子　1996　大学生の仕事についての意識実態の予備的調査　中央学院大学商経論叢, 10（2）, 49-64.

文部科学省：グローバル化に対応した英語教育改革実施計画 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/__icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf（2014 年 1 月 20 日）.

永野仁　2005　就職活動成功要因としての就職意識-大学生調査の分析-　政経論叢,　73（5・6）, 645-665.

佐藤博晴・佐藤夏子　2008　本学[山形県立米沢女子短期大学]学生の英語学習に対する動機付けと学習行動に関する調査　山形県立米沢女子短期大学紀要,（44）, 25-33.

佐藤純･広田信一　2003　大学生の労働観に関する探索的研究-労働動機の側面から-　筑波大学発達臨床心理学研究, 15, 31-36.

高澤健司　2008　大学生における労働意識と成人イメージの関連　日本教育心理学会総会発表論文集,（50）, 512.

TOEIC：企業が求める英語力とは
http://square.toeic.or.jp/job/company/1.html（2014 年 1 月 20 日）.

和田美知子　2000　大学生の就職観に見られる学年・性別の影響　城西大学女子短期大学部紀要, 17（1）, 87-94 .

和田美知子　2001　企業選択に見る大学生の就職観に関する比較研究　城西大学女子短期大学部紀要, 18（1）, 13-21.

資料 1

大学生の語学に対する意識調査
各層別調査票配布数と有効回答数

	性別	調査票配布数	有効回答数
低学年	男	119	32
	女	75	45
高学年	男	43	29
	女	90	43
合計		327	149

資料2　各設問への回答比率

「大学生の語学に対する意識調査」

調査ご協力のお願い

私達は、量的社会調査実習の授業の一環として、大学生の語学に対する意識調査を行なっています。語学学習や仕事に対する大学生の考え方や行動を明らかにしたいと考えています。回答していただいた結果は、全体的な傾向を調べるための統計分析のみに使用し、個人のデータをそのほかの目的に流用することはいっさいありません。ぜひともご協力をお願いいたします。

お答えいただきました回答用紙は、10 月８日(火)　までに、

1 号館一階教務課の調査票回収ボックスまでお持ちください。

どうぞよろしくお願いいたします。

文芸学部ﾏｽｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 3 年　熊谷　茉紀
文芸学部ﾖｰﾛｯﾊﾟ文化学科 3 年　森　　愛那
量的社会調査実習担当　　鈴木　靖子
ysuzuki@seijo.ac.jp

Ｑ１．現在学習している言語、またはこれまでに学習した言語に関するものです。当てはまるものを選んで○をつけてください。

Ｑ１－１．大学では第一外国語としてどの言語を履修していますか（履修しましたか）。
a 英語　b ドイツ語　c フランス語　d 中国語　e イタリア語　f 韓国語　g ラテン語
h スペイン語　i.その他（　　語）

Ｑ１－２．大学では第二外国語としてどの言語を履修していますか（履修しましたか）。
a 英語　b ドイツ語　c フランス語　d 中国語　e イタリア語　f 韓国語　g ラテン語
h スペイン語　i.その他（　　語）

Ｑ１－３．Ｑ１－１、Ｑ１－２で回答したもの以外に、これまで学習したことがある言語をお答えください（大学以外で学習しているものを含みます）。　＿＿＿＿＿＿＿＿語

Ｑ２．以下に英語の学習方法に関するさまざまな事柄が述べられています。**あなた自身に**どの程度あてはまるでしょうか。次の a、b、c、d のうちから最も近いものを一つ選んで○をつけてください。

a：あてはまる
b：どちらかといえばあてはまる
c：どちらかといえばあてはまらない
d：あてはまらない

アルファベットの下の数値は回答比率(%)	a	b	c	d	無回答
１）必修科目以外に英語の科目を履修している（履修していた）。	41.6	7.4	2.7	48.3	0.0
２）テレビやラジオなどの英語講座で勉強している（勉強していた）。	11.4	12.8	10.7	65.1	0.0
３）英語の読解力がつくように実践している。	10.7	26.2	30.9	30.9	1.3
４）英語学習でわからないことがあったとき自分で調べる。	36.2	45.6	12.8	5.4	0.0
５）英語の聴解力の実践に努めている。	12.8	26.8	35.6	22.8	2.0
６）英語の授業の際にはおおむね予習・復習をしている（していた）。	44.3	28.9	16.8	10.1	0.0
７）英語の作文力がつくように実践している。	2.7	16.8	47.7	32.9	0.0
８）試験や面接前など、限定した期間に集中的に学習している。	59.7	25.5	7.4	7.4	0.0
９）自分独自の英語の勉強法（具体的に：　　）を持っている。	8.1	11.4	24.8	55.7	0.0
１０）英会話学校の講義（自宅個人レッスンを含む）を受けている（受けていた）。	17.4	6.7	6.7	69.1	0.0
１１）英語の授業に 8 割以上出席している（出席していた）。	83.9	10.7	3.4	2.0	0.0
１２）英語資格試験(TOEIC、英検など)を受験したことがある。	77.9	8.7	1.3	12.1	0.0
１３）学習時間や学習範囲を決めて計画的に学習している。	14.1	24.2	38.3	23.5	0.0
１４）自分からすすんで英語で人と話している。	7.4	12.1	23.5	57.0	0.0
１５）英語学習でわからないことがあったとき質問できる相手がいる。	20.1	22.8	28.9	28.2	0.0
１６）英語の会話力が上がるよう実践している。	9.4	20.8	39.6	30.2	0.0
１７）英語学習でつまずくとそのままにしてしまうことが多い。	6.7	34.2	38.9	20.1	0.0
１８）英語が上達すると誰かがほめてくれる。(ほめてくれるのは：　　)	7.4	18.8	29.5	44.3	0.0

Ｑ３．以下にさまざまな英語を学ぶ理由が述べられています。**あなた自身に**どの程度あてはまるでしょうか。次の a、b、c、d のうちから最も近いものを一つ選んで○をつけてください。

a：あてはまる
b：どちらかといえばあてはまる
c：どちらかといえばあてはまらない
d：あてはまらない

あなたが英語を学習するのは…

アルファベットの下の数値は回答比率(%)	a	b	c	d	無回答
１）英語を使う喜びを知るため。	10.7	38.9	31.5	18.8	0.0
２）英語で映画や音楽、テレビを理解できるようになるため。	31.5	42.3	19.5	6.7	0.0
３）英語圏の文化や価値観についての知識を得ることが楽しい。	22.1	33.6	30.2	13.4	0.7
４）海外旅行をするため。	34.9	49.7	9.4	6.0	0.0
５）英語という言語についてもっと知るため。	10.1	18.1	40.9	30.9	0.0
６）外国の大学に留学したいと考えている、または留学した。	15.4	18.8	14.8	51.0	0.0
７）英語資格試験で高得点や上の級を取得するため。	33.6	34.2	12.8	19.5	0.0
８）少しでも英語力がついたと感じるのが嬉しい。	35.6	48.3	11.4	4.7	0.0
９）英語を話せる有能な人間であることを示すため。	19.5	34.2	28.2	18.1	0.0
１０）今まで身につけた英語能力を維持する。	27.5	43.6	21.5	7.4	0.0
１１）英語の学習自体が楽しい。	15.4	29.5	37.6	17.4	0.0
１２）外国人と話すため(英語でコミュニケーションとるため)。	30.2	41.6	16.1	12.1	0.0
１３）自分の可能性を広げるため。	31.5	43.6	17.4	7.4	0.0
１４）英語で本や雑誌、新聞などが読めるようになるため。	25.5	45.0	18.1	11.4	0.0
１５）就職活動で有利になるために英語力の養成が必要である。	41.6	40.3	11.4	6.7	0.0
１６）大学の進級や卒業に必要である。	56.4	23.5	12.1	8.1	0.0
１７）いろいろな面から物事が考えられるようになる。	17.4	38.3	30.2	14.1	0.0
１８）将来英語を使って海外で仕事をするため。	11.4	22.8	36.9	28.2	0.7
１９）将来起業するため。	4.0	4.0	26.2	65.8	0.0
２０）学生としての義務である。	36.9	34.9	18.1	10.1	0.0

２１）英語以外の語学の学習で工夫したことはありますか。

Ｑ４．以下に人が働く理由についてさまざまな事柄が述べられています。あなた自身の考えに最も近いのはどれでしょうか。次の a、b、c、d、e のうちから一つを選んで○をつけてください。

a：とてもそう思う
b：少しそう思う
c：どちらともいえない
d：あまりそう思わない
e：まったくそう思わない

人が働くのは…

アルファベットの下の数値は回答比率(%)	a	b	c	d	e	無回答
１）社会の義務だから。	36.9	42.3	12.1	4.7	3.4	0.7
２）自分の能力を伸ばすため。	30.9	49.0	12.8	5.4	2.0	0.0
３）働かないと世間体が悪いから。	28.9	41.6	14.8	10.7	4.0	0.0
４）良い暮らしをするため。	57.0	35.6	6.7	0.7	0.0	0.0
５）働かないと人から非難されるから。	16.8	35.6	25.5	15.4	6.7	0.0
６）裕福な暮らしをするため。	43.0	43.6	10.1	1.3	2.0	0.0
７）周りの人がみんな働くから。	28.9	37.6	16.8	10.1	6.7	0.0
８）自分のやりたいことを見つけるため。	43.0	38.9	11.4	3.4	3.4	0.0
９）社会とつながり続けるため。	42.3	40.3	10.7	4.7	1.3	0.7
１０）新たなことに挑戦するため。	34.2	38.9	17.4	6.0	3.4	0.0
１１）働かないとみっともないから。	24.8	44.3	16.1	8.1	6.7	0.0
１２）自分に自信をつけるため。	34.2	38.9	18.8	7.4	0.7	0.0
１３）社会に貢献するため。	45.6	38.3	8.7	4.0	3.4	0.0
１４）達成感を得るため。	43.6	37.6	10.7	6.0	2.0	0.0
１５）当たり前のことだから。	41.6	38.3	15.4	2.7	2.0	0.0
１６）金持ちになるため。	24.8	40.9	24.2	7.4	2.7	0.0
１７）自分が望むものを得るため。	45.0	37.6	14.1	2.0	1.3	0.0
１８）人間として成長するため。	41.6	43.6	10.7	2.0	2.0	0.0
１９）人の役に立つため。	52.3	32.2	8.7	4.0	2.7	0.0
２０）自分の可能性を広げるため。	45.6	38.3	13.4	2.0	0.7	0.0

Ｑ５．あなたの英語へのとりくみについてうかがいます。各質問で述べられている 2 つの事柄について、あなた自身はどちらに近いでしょうか。a、b あてはまるほうに〇をつけてください。

Ｑ５－1.　a　自発的に英語を学習しているとはいえない　66.4%
　　b　英語を自発的に学習している　30.9%

Ｑ５－2.　a　英語は好きである　57.7%
　　b　どちらかというと英語が好きとはいえない　40.9%

Ｑ５－3.　a　どちらかというと英語は得意とはいえない　73.8%
　　b　英語が得意なほうである　24.8%

Ｑ６．あなたの性別を教えてください。　男性　40.9%　女性　59.1%

Ｑ７．あなたの所属と学年を教えてください。　学部　　年

ご協力ありがとうございました。

資料 3　大学生の語学に対する意識調査

習得言語の回答比率と自由記述回答

大学での履修言語（数値は回答比率）

	第一外国語	第二外国語
英語	87.2%	12.8%
ドイツ語	2.7%	16.8%
フランス語	8.7%	26.8%
中国語	2.7%	24.8%
イタリア語	0.0%	8.1%
韓国語	0.0%	0.7%
ラテン語	0.0%	0.0%
スペイン語	0.0%	0.0%
その他	0.0%	1.3%

大学以外で学習した言語（数値は回答数）

韓国語	13
中国語	2
フィジー語	1
イタリア語	2
スペイン語	1
フランス語	1
ラテン語	1
サンスクリット語	1
英語	1
アイスランド語	1
合計	24

英語学習における工夫(数値は人数)

メディア利用	ドラマ/英文サイト	2
個人学習	音読/書いて記憶	7
	合計	9

英語以外の語学学習の工夫（数値は人数）

メディア利用	CD/NHK講座/映画	6
友人他者と学習	友人/中国人との会話	2
環境設定	留学	2
個人学習	音読/書いて記憶	8
合計		18